

「大学改革案の大枠整理（追加）」についての国際文化学部の意見表明

2003年9月29日 国際文化学部教授会

まず改革案の策定手続きに関して疑問がある。教授会と評議会の意見を十分反映していない。プロジェクトR委員会とその幹事会に改革案を委託したのは、各部局の意見を十分尊重するとの前提であったにもかかわらず、教授会からの意見と提言に学長は正面から答えていない。幹事会の議題はHPに載せてあるが、具体的な議論の内容は全く伺うことが出来ない。このような大学全体の改革には透明性と情報の公開が原則である。プロジェクトR委員会も4回開かれただけであり、改革案の説明と質問を受けることで時間がとられ、意見交換が不十分であると言わざるを得ない。

具体的なコース制などまで改革案が踏み込むのならば、もっと各教授会のメンバーがWGなどに参加して意見を述べる機会を作るべきである。僅か1名の教授会メンバーが個人の資格で参加している幹事会では機能が不足している。

以下は9月29日に開かれた臨時教授会の意見を纏めたものである。

1. 学府一院構想には賛成するが、3学部を統合して「国際総合科学部」にすることには反対する。
2. 「リベラル・アーツ」教育に必要なスタッフを確保するとともに、十分な機構を確立すべきである。
3. 教員任期制の全面的導入には賛成できない。
4. 博士後期課程の廃止には反対する。
5. 入試は学府単位で実施すべきである。
6. 教授会の位置づけとその権限をきちんと定義すべきである。
7. 評価制度は普遍的な原理に基づくべきであり、教育・学問知識を持った人々によって行われることを要求する。
8. 「国際教養学府」の名称は「国際文化・教養学府」とすべきである。
9. 在学生（学部・大学院生）に不利益にならないように、在学期間中のカリキュラムを保証すべきである。